

# 育成すべき資質・能力を育む学びの在り方に関する研究 (中間報告)

— 「深い学び」を実現する学習過程に着目した高等学校における授業実践 —

石井 晴 絵<sup>1</sup> 中 根 賢<sup>1</sup>

学習指導要領改訂の審議を契機にアクティブ・ラーニングが注目されているが、目的や方策についての理解は十分ではない現状がある。本研究は、「主体的・対話的で深い学び」の視点を踏まえた具体的な授業イメージを示すことにより、アクティブ・ラーニングについての理解を深め、子どもたちに必要な資質・能力を育成するための授業改善の推進に資することを旨とする。県立高等学校での三つの実践例を中心に研究成果をまとめた。

## はじめに

社会の急激な変化や技術革新の進展は、今後、子どもたちがどのようなキャリアを選択するかにかかわらず、大きな影響を及ぼす。将来就く職業や労働の在り方が大きく変わるといふ予測もある。こうした子どもたちの未来を見据え、学校教育において、新しい時代を生きるために必要な資質・能力を育む必要がある。

以上のような認識に基づいて、次期学習指導要領は、「社会に開かれた教育課程」の実現を目標として、中央教育審議会で改訂に向けた検討が行われ、平成 28 年 12 月「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（以下、「答申」という）が示された。

平成 26 年 11 月の文部科学大臣からの諮問において、子どもたちが必要な資質・能力を身に付けるために「どのように学ぶか」の視点として提示されたアクティブ・ラーニングが、注目され関心を集めている。

一方で、平成 28 年 8 月の中央教育審議会「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」（以下、「審議のまとめ」という）には、アクティブ・ラーニングという言葉が先行して、「活動あって学びなし」と批判される授業や、特定の方法にこだわり、指導の型をなぞるだけの授業になりかねないとの懸念や危惧があること、また、アクティブ・ラーニングの視点の一つとして示されている「深い学び」についてはイメージがつかみにくいとの指摘があることが示されている。

このような懸念や危惧及び指摘は、アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善の必要性や意義を理解するが、どのように取り組めばよいか分からないという学校現場の状況を反映していると考えられる。

神奈川県立総合教育センターが、各学校の授業改善等への支援として実施している「カリキュラム・コン

サルタント」事業においても、平成 28 年度は、多数の学校から、アクティブ・ラーニングをテーマとする校内研修会での講演や研究授業の指導・助言に係る所員派遣の要請があった。このことも、学校現場の関心の高さや期待を示すとともに、取組について戸惑い、方策を模索している現状を示しているといえる。

本研究は、中央教育審議会が示す「アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善」、すなわち「主体的・対話的で深い学び」について整理し、特に「深い学び」を具体的にイメージした授業実践例を提示する。

子どもたちに求められる資質・能力をよりよく育むために、アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善とはどのようなことであるかについて、実践に基づいて分かりやすく伝え、学校現場での理解を深め、取り組みやすくすることを目指す。

## 研究の目的

アクティブ・ラーニングの視点「主体的・対話的で深い学び」により、どのように授業が改善され、子どもたちのどのような変容につながったかを示す実践例を収集する。検証を踏まえてその成果を普及することにより、求められる資質・能力の育成に向けた授業改善の推進に資する。

## 研究の内容

### 1 研究の概要

本研究の研究期間は、平成 28 年度・29 年度の 2 年間である。研究 1 年目の平成 28 年度は、アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた単元の授業を実践し、生徒がどのように変容したかを検証する。

まず、「審議のまとめ」に基づき、これからの時代に求められる資質・能力及びアクティブ・ラーニングの視点からの授業改善について整理した。さらに、この整理を共通認識として、県立高等学校 3 校の調査研

1 教育課題研究課 指導主事

究協力員が授業実践を行い、その成果を検証した。本稿はこの研究1年目の取組をまとめた中間報告である。

## 2 アクティブ・ラーニングについての概念整理

### (1) 資質・能力の育成

アクティブ・ラーニングの目指すものは、変化が激しく将来の予測が困難な時代を生きる子どもたちに必要な力を、授業を通して確実に育むことである。子どもたちに必要な力である「育成を目指す資質・能力」は、次の三つの柱に整理されている（「審議のまとめ」 pp. 26-28 文中のゴシックは筆者）。

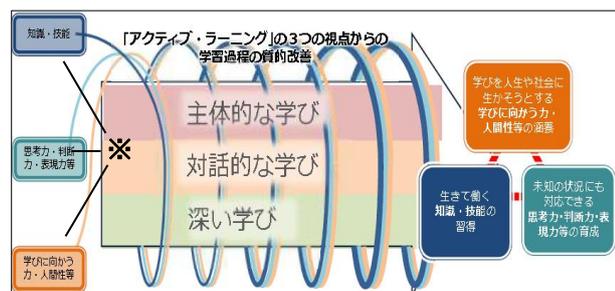
#### 育成を目指す資質・能力の三つの柱

- ①「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）」
- ②「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）」
- ③「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）」

### (2) 学習過程の質的改善

子どもたちが、この資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けることができるようにするためには、「学びの質」が重要である。学習の内容と方法の両方を重視し、子どもたちの学びを質的に高めていくことが求められる。

資質・能力の育成とアクティブ・ラーニングの視点の関係は、「審議のまとめ」補足資料（p. 12）に次のように示されている（第1図 図中の※は筆者）。



第1図 資質・能力とアクティブ・ラーニングの視点

三つの柱として整理された資質・能力（第1図中の※）は、直線的にはなく、螺旋状に図示されており、資質・能力が相互に関連していることを示している。これは、「例えば、習得・活用・探究のプロセスにおいては、習得された知識・技能が思考・判断・表現において活用されるという一方通行の関係ではなく、思考・判断・表現を経て知識・技能が生きて働くものとして習得されたり、思考・判断・表現の中で知識・技能が更新されたりすることなども含む」（「審議のまとめ」補足資料 p. 12）と説明されている。子どもたちが、学びの過程の中で、身に付けた資質・能力の三つの柱を活用・

発揮しながら物事を捉え思考することを通じて、資質・能力がさらに伸ばされたり、新たに育まれたりしていくことが重要である。そのような学びの過程をつくり出すための指導の工夫が求められる。

### (3) 「主体的・対話的で深い学び」の実現

三つの柱に整理された資質・能力を身に付けていくためには、学びの過程において子どもたちが、主体的に学ぶことの意味と自分の人生や社会の在り方を結び付けたり、多様な人との対話を通じて考えを広げたり、単に知識を記憶する学びにとどまらず、身に付けた資質・能力が様々な課題の対応にいかせることを実感できるように学びを深めたりすることが重要である。アクティブ・ラーニングは、このような「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、共有すべき授業改善の視点として位置付けられ、その具体的な内容については、次の三つの視点に整理されている（「審議のまとめ」 p. 46 文中のゴシック及び注は筆者）。

#### アクティブ・ラーニングの三つの視点

- ① 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「**主体的な学び**」が実現できているか。
- ② 子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「**対話的な学び**」が実現できているか。
- ③ 各教科等で習得した概念や考え方を活用した「**見方・考え方**」を働かせ、問いを見いだして解決したり、自己の考えを形成し表したり、思いを基に構想、創造したりすることに向かう「**深い学び**」が実現できているか。

注 ③は「答申」(p. 50)では次のように示されている。

習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。

これらの三つの視点は、相互に影響し合うものであり、学習過程の中では一体的に実現されるものであるが、授業改善の視点としては、それぞれを固有の視点として捉える。子どもたちの学びがこれらの三つの視点を満たすものになっているかを把握して授業を改善していくことが求められている。

以上を踏まえて、本研究は、「資質・能力の育成」、「学習過程の質的改善」、「主体的・対話的で深い学び」の三つをキーワードとして、アクティブ・ラーニングの視点から、質の高い学びを実現する授業の在り

方を探るものとする。

### 3 調査研究協力員による授業実践

#### (1) 「深い学び」の実現を目指して

アクティブ・ラーニングの視点からの学びに特定の型はなく、多様な方法と工夫がある。このことについての学校現場での理解を促し、取組を進める一助とするために、調査研究協力員が授業実践を実施し、「主体的・対話的で深い学び」の視点を踏まえた具体的な授業イメージを提示する。この授業実践は、三つの視点のうち、特に「深い学び」の実現を目指すものとし、教科の学習内容を深く学ぶために「どのように学ぶか」、また、深く学ぶことによって「何ができるようになるか」を明確にした単元の指導と評価の計画として構想し、実施した。

ねらいは、次の二点である。一つは、「深い学び」に着目した学習過程の構築や指導方法についての工夫を明確に示すことである。もう一つは、これらの工夫によって、生徒の実態と教科の目標を踏まえて授業構想の段階で明確にした身に付けさせたい力、資質・能力が育成されたことを検証することである。

#### (2) 「深い学び」を実現するために

平成 28 年 9 月に開催した調査研究協力員会において、前章の整理を共通理解した。その上で、第一に、生徒の現状と身に付けさせたい力を明確にすること、第二に、生徒が深く学ぶことを具体的にイメージすること、一と二を反映して学習過程・学習指導を工夫することの三点を踏まえて授業を構想することとし、10 月に事前検討を行い、11 月に授業を実施した。

本研究における授業実践の特徴は、「深い学び」の実現に向けて、「どのような内容を（単元観）、どのような生徒が（生徒観）、どのように学ぶことでどのような力を付けるか（指導観）」を、授業構想の段階で明確にし、整理したことである。

#### 「深い学び」を実現するための事前整理

##### ①単元観：本単元の特徴

本単元のどのような学習内容が、生徒たちに求められる資質・能力の育成につながると捉えているか。

##### ②生徒観：本単元を学習するに当たっての生徒の学力・学習状況の実態

これまでの学習経過で身に付いている力と、本単元で身に付けさせたい力は何か。

##### ③指導観：深い学びのイメージ

本単元を生徒が深く学ぶということをどのようにイメージして学習過程や指導を工夫したか。

### 4 実践例 1（理科・生物）

#### (1) 本実践における「深い学び」

これまでに習得した実験の技能と、酵素の働きなど他の単元の学習で得た知識を使って、自分たちで実験の手立てを考えるを通して、実験と結果の検証に主体的に取り組み、刺激に対する生物の反応について様々な視点から考える。

#### (2) 授業実践の概要

○対象生徒	2 学年 3 クラス
○教科・科目	理科・生物
○単元名・時間数	刺激に対する反応・6 時間

#### (3) 「深い学び」を実現するための事前整理

##### ア 単元観

刺激に対する効果器の反応（主に筋肉の働き）は日常的に我々が行っている生命現象であり、身近な分野である。自分たちの体のメカニズムがどのようになっているかを理解し、実生活に即して考察できる。

##### イ 生徒観

積極的に生物を選択したとは限らず、基礎力や表現力に個人差が大きい。これまでに学習した内容と実験の手立てを結び付けて話し合わせることで、主体的に考える力を付ける。

##### ウ 指導観

現象を見て疑問を持ち、自分たちで実験を組み立て、実験を行って結果を考察する。この一連の過程で、自分たちで考える力、実験結果を検証する力を養う。

#### (4) 学習指導案の概略

##### ア 単元で身に付けさせたい力

刺激に対する反応について多面的な視点で捉え、知識を蓄積するとともに、自分で課題を見付け、結果を処理しようとする力。

##### イ 単元の評価規準

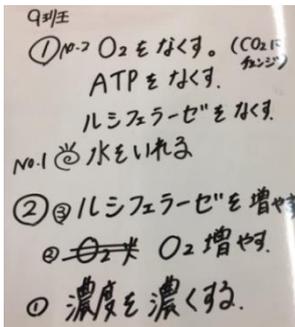
関心・意欲・態度(a)	反応の仕組みに興味を持ち、意欲的に探究しようとしている。
思考・判断・表現(b)	反応の仕組みについて考えることができ、導き出した考えを的確に表現している。
観察・実験の技能(c)	実験の基本操作を習得し、設定した課題を探究する技能を身に付けている。
知識・理解(d)	刺激に対する反応における神経系・効果器の仕組みを理解している。

##### ウ 単元の指導と評価の計画

時	学習内容 学習活動	指導上の留意点	評価の観点			
			a	b	c	d
1 5 3	筋肉の構造、各部の名称。 筋収縮の仕組み。 筋収縮とエネルギーの関係。 筋肉以外の効果器。	筋肉、体の構造を理解させる。 筋収縮とエネルギーの関係、筋肉疲労等の関係に気付かせる。 筋肉以外の効果器について考察させる。		○		○

4	発光器官（効果器）の理解を深めるための実験に向けた準備。 自己課題の設定。	実験の手立てを自分たちで考え、設定させることにより、深い理解につなげる。	○	○		
5	発光の実験。 考察のまとめ。	自分たちで設定した課題の検証を行わせる。	○		○	
6	実験結果の考察。 各班の結果から理解できることのまとめ。	実験結果を検証させ、結果の処理を行う力を養う。	○	○		

(5) 「深い学び」を実現する学習過程・指導の工夫  
本実践の中核をなすのは、第4時の、生徒が自分たちで実験の手立てを考える学習活動である。まず、ホタルの発光の現象を演示し、なぜ発光するのか疑問を持たせる。その上で発光の仕組みとホタルの生態を整理させ、自分たちの知識で実験を組み立てさせる。具体的には、発光を止める・強めるためにはどうすればよいかの二点を考えさせた。



第2図 実験の手立て  
(例)

個々の考えをワークシートに整理してから、班で話し合っ、ホワイトボードに実験の手立てを書かせる(第2図)。このホワイトボードを回覧し、他の班の実験の手立てを共有させた。実験は各班が考えた、酸素を取り除く、水素を入れる、真空にする、試薬の量を増やす・濃度を高める、温度を変化させる、塩酸・水を加えるなどの手立てで行った。実験後に行わせた検証では、生徒は、自分たちの実験について、他の班の実験方法や結果も踏まえて考察を行っていた。

(6) 生徒の変容と資質・能力の育成

生徒たちは、これまでの学習で身に付けた知識や実験の技能を使い、実験の手立てを考えることができた。話し合って考えさせることで、自分だけではどうしたらよいか分からない生徒も積極的に取り組むことができた。また、実験の成功・失敗にかかわらず、結果について、事前に共有した他の班の意見も踏まえて様々な視点から考察し、検証することができた。

自分たちで手立てを考えることで、実験そのものにも、結果の考察にも、主体的に取り組むことができた。本単元で、受け身ではなく主体的に学習に取り組むことができた、生徒が自覚した振り返りも見られた。

○生徒の記述から

- ・今まで学んできた知識を重ねて考えることで見えてくるものがいくつもあって感動した。冷やすことで酵素の働きが止まるかもしれないという考えは、たくさん

学んできた中のことをいかせていてよいと思う。

- ・生物の生息状況を考えてどうすれば反応しなくなるかを話し合って考えるのは楽しく、実験前の予想はどれも面白い。
- ・自分たちと他の班では方法が異なるので、どれがうまくいくのが楽しみだ。
- ・温めたり冷やしたりしている班があったので、酵素には最もよく働く温度があるのではないかと思った。
- ・実際に考えを実現できるのは楽しかった。もっと様々なことを試して、うまくいくまでやってみたい。
- ・予想したやり方ではうまくいかなかったが、どうしてできなかったかと考えるのが理科っぽくて楽しかった。
- ・これまでの自分は、先生の説明を聞いてワークシートの穴埋めをするなど受け身な姿勢であった。実験の趣旨を分からないまま取り組んでいた。今回は、自分で教科書を読み進めた上で先生の話聞いて理解を深めることができ、実験では、物事がなぜ起こるのか発想する力が付いた。

## 5 実践例2 (外国語・コミュニケーション英語I)

(1) 本実践における「深い学び」

バイオミメティクス(生物から学ぶことで生まれた製品など)について書かれた英文を読むために必要な知識を身に付けながら、内容に関心を持って主体的に読むとともに、読んで得た知識を基に、社会や人々の役に立つ発明を考え、英語で発表し交流する。

(2) 授業実践の概要

○対象生徒	1学年3クラス
○教科・科目	外国語・コミュニケーション英語I
○単元名・時間数	バイオミメティクス・6時間

(3) 「深い学び」を実現するための事前整理

ア 単元観

人々の生活をよりよくするためのものづくりについて考えさせる。英文を読んだ後、グループ内で自分のバイオミメティクスのアイデアを英語で発表する。他の人間や新しい社会の姿を見据えてアイデアを出すことで、世界との関わりや社会貢献といった、より大きな目的に向かって自分の考えを生み出していこうとする態度を養うことができる。

イ 生徒観

読解から得た知識をいかして、自分の考えなどを英語で表現する活動は8単元目で、生徒は学習の見通しを持って取り組んでいる。これまでではペアでの共有や、代表者による発表が多かったが、本単元では、グループの中で全員が個人発表をする場面を設定した。他者を尊重しながら対話を図る方法を学び、身に付いたコミュニケーション力を自己評価で振り返らせたい。

ウ 指導観

読んで知ろうとすること自体に深い学びがある。「読む前活動」により、英文を読むことへの動機付けと、

「読んだ後活動」を含む学習への見通しを持たせることで、読解はより深い学びとなる。また、知ったことを周りと共有する活動では、読解の深まりを確認し合うことができる。

(4) 学習指導案の概略

ア 単元で身に付けさせたい力

英文を読み、自然界から科学技術のヒントを見付け、その工学的応用について自分の考えを英語で話す力。

イ 単元の評価規準

コミュニケーションへの関心・意欲・態度(a)	ペアで協力して、推測するなどして読み進めている。 グループ内発表で相手に確認したり、繰り返しや説明を求めたりしながら聞き続けている。
外国語表現の能力(b)	自然界から科学技術のヒントを見付け、その工学的応用について自分の考えを英語で適切に話すことができる。
外国語理解の能力(c)	英文を読んで、バイオミメティクス(生物から学ぶことで生まれた製品など)の例を理解している。
言語や文化についての知識・理解(d)	現在完了進行形、関係副詞、形式目的語itについての知識を身に付けている。

ウ 単元の指導と評価の計画

時	学習内容 学習活動	指導上の留意点	評価の観点			
			a	b	c	d
1	[読む前活動] バイオミメティクスを知り、自分の好きな生物とその特徴を考える。	読む内容への興味を高め、学習の見通しを持たせる。 生物担当の教員による説明。			○	
2 5	[読む活動] 内容読解、文法、語法理解問題。 本文の再話活動(リテリング)。	文法知識を確認し、本文の内容を捉えさせる。 本文の内容を詳しく理解させる。	○		○	○
6	[読んだ後活動] グループ内で自分のバイオミメティクスのアイデアを発表する。	読んだ知識を活用し、理解を深め、表現させる。	○	○		

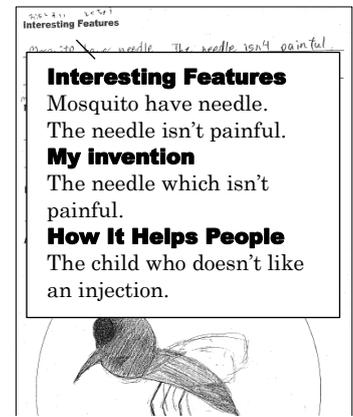
(5) 「深い学び」を実現する学習過程・指導の工夫

本実践の特徴は、読解を深い学びとするための学習過程の構築と学習活動の工夫である。読まされるのではなく、生徒が文章に主体的に向き合って読むことを深い学びと捉え、その実現に向けて前後の活動を設定した。ねらいと工夫は次のとおりである。

読む前活動 Pre-reading	読む活動 While-reading	読んだ後活動 Post-reading
----------------------	-----------------------	------------------------

読解の動機付けを行い、必要な言語知識を与える。文章の主題について考える。	個々に読解し、考える。	読解によって得た知識を活用し、自分の考えを発信する。
--------------------------------------	-------------	----------------------------

「読む前活動」は、本文の内容についての興味関心の喚起、背景知識の提示を目的とし、本単元で扱うバイオミメティクスについて、生物担当の教員による講義形式の説明を聞かせ、動機付けとした。主体的に読ませるためである。「読む活動」では、個々に文法・語法問題や内容読解問題に取り組み、ペアで助け合いながら本文を読み進める学習形態を取り入れた。さらに、内容をより詳しく理解させるために、本文の内容を本文とは違う表現で適切に伝えるリテリングの活動を行わせた。本文の内容を理解して終わるのではなく、読解で得た知識を活用させる課題を「読んだ後活動」として設定した。バイオミメティクスを用いて、生物の特徴をいかし、どのような人々の役に立つのかを考えた発明(第3図)を、英語で発表させた。まとめとして、クラス全体に向けてグループで選ばれた生徒が発表をし、読んで得た知識を基に考えたものを共有した。また、発表の際には話し手・聞き手としての自己評価を行わせ、身に付いたコミュニケーション能力を確認させた。なお、生徒の書いた英文については、回収したワークシートを教員が添削し、英文の誤りを訂正して返却した。



第3図 バイオミメティクスによる発明(例)

(6) 生徒の変容と資質・能力の育成  
本実践は実施校の公開研究授業を兼ねており、校内テーマに即して、対象生徒1クラス38名に、次の三点を尋ね、授業の振り返りを行った。

「授業を通して、自分で考え、人との関わりを通してその考えを深めることができたか」については、「かなり当てはまる」16名、「ほぼ当てはまる」21名、「あまり当てはまらない」1名、「ほとんど当てはまらない」0名であった。97%の生徒が思考を深めることができたと感じている。

「授業を通して、自分一人で考え、人との関わりを通してその考えを深めることができたか」については、「かなり当てはまる」16名、「ほぼ当てはまる」21名、「あまり当てはまらない」1名、「ほとんど当てはまらない」0名であった。97%の生徒が思考を深めることができたと感じている。

「授業を通して、自分一人で考え、人との関わりを通してその考えを深めることができたか」については、「かなり当てはまる」16名、「ほぼ当てはまる」21名、「あまり当てはまらない」1名、「ほとんど当てはまらない」0名であった。97%の生徒が思考を深めることができたと感じている。

「授業を通して、自分一人で考え、人との関わりを通してその考えを深めることができたか」については、「かなり当てはまる」16名、「ほぼ当てはまる」21名、「あまり当てはまらない」1名、「ほとんど当てはまらない」0名であった。97%の生徒が思考を深めることができたと感じている。

と」などの記述が見られた。本文を主体的に読み、読んだことを基に実生活にいかすための自分の考えを持ち、それを英語で表現しようとする力が育成されたことが分かる。

「授業のどのような場面で、自分の考えが深まったか」については、プレゼンテーションやグループ活動の場を挙げる生徒が多く、「質問されて自分では気付かなかったことが分かった」、「自分と比較して他者の意見を理解することができた」といった記述が見られた。聞き手に向けて話すことや、他者の意見を聞くことで学びが深まることを示していると考えられる。

以上の結果は、実施校の研究テーマの「生徒が主体的に思考し学ぶための具体的な手立てを組み込んだ授業の実践」を実現した成果であるが、生徒が主体的に英文に向き合って読むための、一連の学習過程の工夫が効果的であったことも示していると考えられる。

また、生徒の自己評価の集計結果を見ると、話し手として「大きな声で話した」88%・「聴衆を見た」76%、聞き手として「話し手を見た」99%と比較して、聞き手として「質問やコメントをした」は71%でやや低い割合になっている。これは、話すこと（発信）に比べ、聞くこと（受信）については、能動的（アクティブ）に取り組むように意識させることや、具体的な方法についての指導が十分に行われていないためではないかと分析した。能動的に聞く力と、その育成に向けた指導は、今後の取組の課題の一つと考えられる。

## 6 実践例3（外国語・英語表現Ⅰ）

### (1) 本実践における「深い学び」

学び合いにより理解を深め習得した文法や構文の知識が、場面に合わせてどのように使えるかをグループで考えて会話文を作成し、発表することを通して、主体的に英文を書くことや話すことに取り組む。

### (2) 授業実践の概要

○対象生徒	1学年2クラス
○教科・科目	外国語・英語表現Ⅰ
○単元名・時間数	動名詞・6時間

### (3) 「深い学び」を実現するための事前整理

#### ア 単元観

グループ活動や作り上げたものを英語で発表することは、自分の考えを言葉で「発信」することや、既習事項を「使う」ことになり、主体的に粘り強く取り組む力や、他者と対話的に学ぶ姿勢の育成につながる。また、振り返りをさせることにより、新たな課題を見つけて取り組む力の育成につながる。

#### イ 生徒観

学力に差があり、英語に対しての苦手意識を持つ生徒もいる。教員の文法事項の解説後、すぐに生徒がグループで教え合い、最後に生徒が全体に解説を行うという学習形態（スモールティーチャー）にしているた

め、グループで協力する力や、考えを説明する力が身に付き始めている。グループでの協力をさらに重視するとともに、英語で表現する力を身に付けさせたい。

#### ウ 指導観

見通しを持って学習に取り組むことができるよう、最初に本時の流れや目標を伝える。生徒一人ひとりが考えたり感じたりしたことを、他者に伝えることができる場面を作るためにグループワークを取り入れる。

また、自己の活動を振り返り、課題を見付け、次につなげることができるよう、振り返りシートを活用する。

#### (4) 学習指導案の概略

##### ア 単元で身に付けさせたい力

動名詞の働きを理解し、互いに協力しながら「話す」「書く」ことで、情報や考えなどを英語で表現する力。

##### イ 単元の評価規準

コミュニケーションへの関心・意欲・態度(a)	グループ内で積極的に言語活動を行い、コミュニケーションを図ろうとする。
外国語表現の能力(b)	動名詞を駆使し、「話す」「書く」ことで情報や考えなどを適切に伝えている。
言語や文化についての知識・理解(c)	英語の仕組みや言葉の意味、動名詞の働きや知識を身に付けている。

##### ウ 単元の指導と評価の計画

時	学習内容 学習活動	指導上の留意点	評価の観点		
			a	b	c
1 4	動名詞 演習、発表（スモールティーチャー）	知識を定着させるために、グループ内での言語活動を充実させる。	○		○
	慣用表現 演習、英作文		○	○	
6	パフォーマンステスト グループで協力して動名詞を用いた会話文を作成し、発表する。	活動のねらいを明確に伝える。 机間指導により必要に応じた支援を行う。 会話文について確認の解説を行う。	○	○	

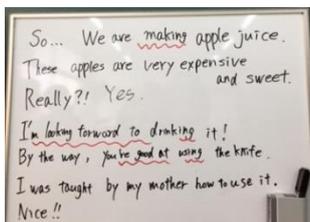
### (5) 「深い学び」を実現する学習過程・指導の工夫

グループで協力して取り組ませることを重視し、学び合いにより文法事項等の学習内容を理解させることや、習得した知識を使って会話文を作成し発表することにグループで取り組ませた。その際、見通しを持って主体的に取り組むことができるよう、学習の目標や評価規準を明確に示した。

本実践の工夫は、学習過程の中で資質・能力の三つの柱に示された力を生徒が発揮する場面、すなわち、既習の知識・技能を使って思考・判断・表現し、学んだことを次につなげる場面を、単元の中に設定したこ

とである。

パフォーマンステストとして実施した第6時の学習活動では、生徒たちにあらかじめ選ばせた絵の場面を



第4図 動名詞を用いた会話文(例)

発表させた。発表後に、絵とホワイトボードを見ながら、動名詞と会話に用いられた表現について、教員が解説を行った。第4図の例では、既習の文法事項の分詞を、動名詞と使い分けて会話を作成していたので、その点を

指摘して知識を整理した。また、生徒に各班の発表を評価させるとともに、自分の班の発表と自己の取組状況についても評価を行わせ、さらに、振り返りとして、成果と今後の課題、身に付いた力を記述させた。

#### (6) 生徒の変容と資質・能力の育成

学習した知識を活用して考え、他者と考えを伝え合いながら会話を作り上げる場面や、人前で会話を行い、英語を話す場面を設定することで、英語を使う力を発揮させることができた。

習った知識をいかして、どのように使うかを考えさせることによって、学習内容についての理解が深まった。また、学習したことが実際に使えるということを実感したり、人前で英語を話すことを経験したりすることにより、英語を話すことへの抵抗感の払拭や、もっと知りたい、理解したことや気付いたことを使って次はもっとうまく発表したいなどの意欲につながった。

#### ○生徒の記述から

- ・グループで単語や文法の意味を調べて英語の力が付いたし、互いに意見を出し合って交渉することができた。
- ・英語で自然な文で会話する感覚が少しつかめたと思う。
- ・絵のような場面に実際に出会ったときに、英文を考えることができる力を身に付けられた。
- ・人前で英語を話す力と、自分たちの持っている知識の使い方を学ぶことができた。
- ・発音をあまり気にせず、積極的に英語を話す力が少し身に付いたと思った。
- ・習った文法を実生活でどのように使いこなすかを考える力、皆で協力して、どのようによい発表ができるかを考え出す力、他の班の発表を聞いて、次にどのようなことを取り入れればよいかを考える力が付いた。

## 研究のまとめ

### 1 研究の成果

#### (1) 「深い学び」をイメージする

生徒が単元の学習内容を深く学ぶことを具体的にイメージして授業を構想したところ、「主体的な学び」と「対話的な学び」がおのずと取り入れられ、単元で身に付けさせたい力を育成することができた。

これは、「深い学び」に着目して、その実現を意識して授業を構想することにより、アクティブ・ラーニングの視点からの学びである「主体的・対話的で深い学び」の三つの視点が、結果的に全て取り入れられた学習過程になったということである。

調査研究協力員からは、「深い学び」の実現に向けて、生徒が本単元を深く学ぶことを具体的にイメージする際に、「どのような内容を(単元観)、どのような生徒が(生徒観)、どのように学ぶことでどのような力を付けるか(指導観)」を授業構想の段階で明確にした事前整理が有効であったと報告されている。

子どもたちに身に付けさせたい力を明確にし、その力を付けるためには、どのように学ぶことが「深い学び」になるのかを具体的にイメージする。その実現に向けて、どのような学習過程で、どのような学習活動を行わせ、指導するかを「デザイン」して授業を構想する。本研究のまとめとして、このことを、アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善の一つの在り方として提示したい。

#### (2) 「深い学び」を実現する

本研究の授業実践から得られた、「深い学び」の実現に向けて効果的であった学習過程・指導の工夫を、次の五つに示す。特に、「ア」と「イ」については、「深い学び」と、「主体的な学び」及び「対話的な学び」との関連を示した検証になったと考える。

##### ア 主体的に学ばせる

どの実践においても、「深い学び」とするために、生徒が主体的に学ぶことを重視していた。

主体的に学ばせるための具体的な工夫としては、「見通しを持たせること」や「振り返りを行わせること」のほかに、「既習の知識を使わせること」、「実生活とのつながりを意識させること」が共通して取り入れられていた。

「深い学び」とするために、生徒が自分自身で題材や課題にしっかりと向き合うことが大切である。子どもたちの学びを「主体的な学び」にすることは、「深い学び」の実現のためには欠かせないと考えられる。

##### イ 生徒同士の対話を取り入れる

実践はいずれも、学習過程の中に生徒同士の学び合いや教え合い、話し合いといった生徒同士が対話する活動を取り入れていた。

対話的に学ばせることによって、生徒は様々な視点を取り入れて考えを広げ深めることができ、一人では取り組むことが難しいことにも取り組むことができていた。このことは、生徒同士の対話を取り入れたこと

が、考えを深めたり主体的な取組を促したりして、「深い学び」につながったことを示している。

「深い学び」の実現に、「対話的な学び」の一つである、子ども同士の対話が有効に働くと考えられる。

ウ 考えを可視化して交流する

個人やペア、グループで考えたことを、可視化して、発信・受信することで学びを深めることができた。

そのためのツールとして、実践においては、回覧したり並べて比べたりすることができる大きさのホワイトボードの活用が有効であった。

エ 能動的に聞く力を育成する

発表やプレゼンテーションなど、考えたことを発信する学習活動を通して、生徒は学びの深まりを実感していた。

こうした学習活動が「深い学び」の実現に効果を発揮するには、考えをまとめ発信する力とともに、受信する側すなわち聞き手の態度が大切であるという気付きを得ることができた。能動的に聞く力の育成に向けた指導については、今後の課題としたい。

オ 安心・安全な学習環境を設定する

深く学ぶためにグループで話し合うことや、話し合っただけで考えをまとめる活動を行うためには、普段からの学習場面での慣れが必要であることや、自分の考えを述べたり、人前で発表したりする学習活動に、安心して取り組むことができる学習環境の整備が必要であることが分かった。子どもたちの学びの質を高めていくためには、「どのように学ぶか」について、学校を安心・安全な学びの場とするという側面から捉えて、学校全体で取り組む方策を探ることが大切だと考える。

## 2 今後の方向性

(1) 各教科等の特質に応じた「見方・考え方」

「深い学び」の実現に向けた、学びの「深まり」の鍵となるのは、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」であるとされている（「答申」）。この「見方・考え方」については、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会の各ワーキンググループで議論されてきたが、「答申」で各教科別に整理して示された。

「深い学び」の実現に向けた授業イメージを明確に伝えるために、今後はさらに、この「見方・考え方」を軸にした授業実践例を示すことが必要である。

(2) カリキュラム・マネジメント

カリキュラム・マネジメントは、次期学習指導要領の理念の実現のための重要な概念である。「答申」では、学校の教育課程全体で、子どもたちに育成すべき資質・能力を育むために、各教科等の教育内容を相互に関連付けたり、教科等横断的な視点で捉えたりすることの必要性を特に重視している。アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善は、カリキュラム・マネジメントを通して行うことで一層の推進が期待できる。

## 3 平成 29 年度の研究計画

研究 2 年目の平成 29 年度は、以上の方向性を踏まえて、調査研究協力員による授業実践を継続して行い、研究を深化・発展させていく。

また、調査研究協力員の所属校は、県教育委員会の「県立高校改革実施計画（I 期）」指定校の「授業力向上推進重点校」である。この取組との連携を図ることも視野に入れて取り組む。

### おわりに

アクティブ・ラーニングという言葉が流行になっている感があるが、アクティブ・ラーニングの視点からの学びを実現しようとするのは、私たちがこれまで追究してきた、良い授業とは何かを探る不易の試みである。研究を通して、この言葉は、教員が「何をどのように教えるか」から、生徒が「何をどのように学ぶか」に視点を転換すること、すなわち、生徒を主語にして授業を考えるとということを提起しているように感じた。生徒が学びの主体であることを具現化する授業の在り方を引き続き探っていく。

「深い学び」の実現に向けて、授業実践に意欲的に取り組んでくださった調査研究協力員の先生方と、実施校の生徒の皆様に心から感謝を申し上げ、結びとしたい。

〔調査研究協力員〕

県立松陽高等学校 教諭 大石 智子  
県立七里ガ浜高等学校 教諭 中川 崇寛  
県立麻溝台高等学校 教諭 弓削 恵

〔助言者〕

文部科学省初等中等教育局 視学官 田村 学

### 引用文献

中央教育審議会 2016 「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」 pp. 26-28 p. 46  
中央教育審議会 2016 「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ 補足資料」 p. 12  
中央教育審議会 2016 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」 p. 50

### 参考文献

石井英真 2015 『今求められる学力と学びとは—コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影—』日本標準  
松下佳代編著 2015 『ディープ・アクティブラーニング 大学教育を深化させるために』勁草書房  
P. グリフィン他編三宅なほみ監訳 2014 『21世紀型スキル 学びと評価の新たなカタチ』北大路書房